

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2 階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhvg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhvg.org/>



所長の諏訪山だより

とても窮屈な世の中

かなり以前の話になるが、池田勇人とか、田中角栄、大平正芳など、時の首相のモノマネをする芸人をテレビでよく観たものだ。しかし、最近は政治家のモノマネをテレビで観なくなった。安倍前首相や菅首相のモノマネは、プロならむしろかきこいはずはないだろう。麻生元首相なら、プロでなくてもできそうな気がする。現にザ・ニューズペーパーは、現・前・元首相のモノマネをしているが、それはテレビで放映されない。テレビ局は、どうも現政権に忖度しているのではないかと、思ってしまう。2年前に吉本芸人たちが総理公邸を表敬訪問した際に、ビスケット佐竹が当時の安倍首相に似せたメーキャップをして登場したが、これはご愛嬌の範囲内だったのだろう。そのあと、安倍首相は吉本新喜劇に出演し、吉本芸人から「よいしょ」された。

芸人たちがテレビで政権上層部を揶揄し、笑うのは、皇室並みにタブーとなってしまったのではない。皇室タブーで言えば、漫画トリオのネタで、ノック「今日の漫才は真面目にせんとあかん」、パンチ「真面目に漫才するて、なんでや?」、ノック「今日は高松宮さまが来てはるねん」、パンチ・フック「エ〜。ど〜こ〜に〜。どこにもいてはらへんで」、ノック「香川の高松で飲み屋をしてる知り合いのオッサンが来てんのや」というのがあり、テレビで観た憶えがある（漫画トリオの解散は、1968年なので、それ以前の事）。また、ちゃらんぼらんの大西もテレビで昭和天皇の顔マネで笑いを取っていた。こうした時代があったのだ。その昔、「ナルちゃん」「サーヤ」「火星ちゃん」などと、皇族を呼んだのだが、今では誰も「愛子ちゃん」とは言わない。なんだか、とても窮屈な世の中になってしまった。

最近のテレビで言えば、「クローズアップ現代」の国谷裕子キャスターが降ろされ、夜10時からの「クローズアップ現代+」となったが、今春、武田真一アナが降ろされ、「ニュースウォッチ9」の有馬嘉男キャスターも降板した。こうした流れは非常に危険だ。2001年1月にNHKで放送された「問われる戦時性暴力」（日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷を取り上げた特集）に関して、自民党の中川昭一、安倍晋三両議員がNHKに圧力をかけたといわれるが、これを契機に政権がテレビ放送に露骨に介入するようになったと思われる。こうした政権によるマスメディアへの介入とマスメディア自身の忖度が世界180か国中71位という日本の報道自由度ランキングとなってあらわれているのであろう。

報道の自由があって、私たちは必要とする情報の多くを得て、それをもとに議論し合うことができる。その意味で、報道の自由は民主主義の土台のひとつである。権力によるマスメディアへの介入はいうまでもなく、マスメディアの権力に対する忖度もあってはならないのである。多くの人と危機感を共有したい。

所長 石元清英

はじめてみよう！

部落問題学習、考え方・実践のヒント (その7)

当研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017年3月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習』（2,000円＋税）を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、2020年8月、2度目の増刷となりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の16のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。

▶『地域教材を活用しよう』／細田勉（部落解放同盟兵庫県連合会、関西学院大学非常勤講師）

被差別部落の人たちを「差別をされてきた人々」と表現することがあります。えた、非人と呼ばれ「差別されてきた人々」と聞いたとき、子どもたちはどんな印象をもつでしょうか。「差別されてかわいそうだな」とか「しんどかったんじゃないかな」という同情心や、「差別って厳しかっただろうな」というようなイメージしかもたないのではないのでしょうか。

一方で、庭園造りで「天下一」と呼ばれた善阿弥や、『解体新書』を学ぶときに出てくる、腑分けをした「虎松のおじいさん」など、歴史に残る文化に被差別民が関わり、担ってきたということが語られます。逆に言うと、そういう優れた技術や実績がなければ、差別の対象になっても仕方がないのでしょうか。

被差別部落には農村部落も漁村部落もあり、千世帯以上の大きな部落もあれば、数戸という小さな部落もあります。皮革産業のような、いわゆる「部落産業」といわれる仕事を担っている部落もあれば、そういった産業をまったくもたない部落もあります。そして、そこには被差別部落の数だけ、独自の生活があり、歴史があるのです。

差別を受けながらも、人々はたくましく生きてきました。生きるために想像力を発揮し、さまざまな仕事をつくりだしてきました。そして、日々の生活の中で踊りや村芝居など、楽しみも見いだしながら前向きに生活を営んできたのです。それは、部落の人たちの生き抜く力であり、したたかさであると思います。「差別をされてきた人々」ではなく、「差別と闘いながら生き抜いてきた人々」なのです。

被差別部落の人たちは、その時代の主な生産産業から排除されましたが、違う形で生き方を作り上げてきました。それはすごいことだと思うのです。

その姿は、かわいそうでもなければ、哀れまれる対象でもありません。差別の中で生きるのは、生半可なことではありません。生きることそのものが闘いでした。むしろその力強い生き様こそ、我々が伝えていかなければならないことではないのでしょうか。

かつて「解放学級」では、地域教材を活用したさまざまな活動がありました。子どもたちは地域の人に話を聞いて、劇にして文化祭などで発表しました。自分がいま住んでいる地域の歴史を掘り起こし、生き様を知ること、部落問題は身近になり、他人事ではなく、過去のことでない、どこか知らない、遠いところのできごとでなくなるはずでした。

先生方をお願いします。「地域教材」と構えるのではなく「この人たちはどのように暮らしてきたのかな」というささやかな疑問から、部落の人たちに話を聞くことから始めてください。意気込んで訪ねると、ひいてしまう人がいるかもしれません。ふらりと訪ねて「今度学校でこんなことをしようと思いますが、どう思いますか？」というように、気軽に意見を聞いてみるのはいかがでしょうか。まずは、誰かとつながることが大事です。地域の人とつながることで、先生方も自分の言葉で、部落問題を語れるのではないのでしょうか。



『ピンポンさん』

城島充著、角川文庫、2011 年 12 月、792 円(税込)

(『ピンポンさん 異端と自己研鑽のDNA 荻村伊智朗伝』(2007 年、講談社)を加筆・修正し文庫化)

問題てんこ盛りの東京五輪が新型コロナ緊急事態宣言下で始まった。テレビにかじりついて応援している人も「もう五輪なんてうんざり」と思っている人もいるだろう。それはともかく、今だからこそぜひお勧めしたいのが本書だ。

荻村伊智朗——。高 1 の秋に卓球を始め、わずか 5 年半後の 1954 年、第 21 回世界卓球選手権ロンドン大会で世界の頂点に立った。1965 年の引退までに通算 12 個のタイトルを獲得、国際トーナメントでの優勝は 100 回を超えた。

引退後は、国内外で後進の指導にあたるだけでなく技術指導書や卓球専門誌の発行もした。1971 年世界卓球選手権名古屋大会では、中国の 6 年ぶりの世界選手権復帰に水面下で尽力した。中国は文化大革命後、国際的に孤立し、あらゆる競技の国際舞台から姿を消していた。大会での米中選手の思いがけない交流をきっかけに大会後、中国はアメリカチームを中国に招待。「ピンポン外交」はその後、中国の国連加盟、米中国交正常化へとつながった。

国際卓球連盟会長だった 1991 年には、世界選手権千葉大会での史上初「統一コリアチーム」結成に力を注いだ。南北の詰めの段階で、合宿地の問題で暗礁に乗り上げそうになったことを知った荻村はすぐに関係者に連絡を取り、日本で合宿地を準備、統一チーム実現にこぎつけた。統一女子チームを題材に作られた韓国映画『ハナ 奇跡の 46 日間』(2012 年)には、強豪中国を団体決勝で破る感動的なシーンが描かれているが、その感動を陰で支えたのが荻村だった。

統一コリアチームの団旗は白地に朝鮮半島の地図を青で描いたものと決まっていたが、荻村は染色を担当する製作者にこう注文をつけた。「『青』は空のような明るい青ではなく、分断された民族の悲劇を表すような深い色、例えば日本海の海の色を思わせるような『青』にしてほしいんです。背景も真っ白ではなく、その青の深みがひきたつ色にしてください」

それが、戦後、敗戦国の日本ではなく日本の植民地だった朝鮮が南北に分断された歴史を、痛みをもって理解した言葉だったことは、次の言葉からもうかがい知れる。「南北に分断された朝鮮半島の問題はひとつではありません。もし、終戦時のヤルタ会談で日本の分割が決まっていたら、当時、中学 1 年生だった私も何とか日本をひとつにしようがんばっていたはずです」

荻村は世界に知己を持ち信頼を築き、1994 年に 62 歳で亡くなるまで、「スポーツの本質を曲げずに、政治が歩み寄りやすい場を設定する。それがスポーツ側にいる人間の力量です」と、“世界を股にかけ、スポーツで平和を実践”した。その原点はなんだったのだろう。戦争、空襲、多感な 13 歳で経験した敗戦、占領、社会の価値観の大きな変化……。21 歳で行った初めての海外、第 2 次大戦の敵国だったイギリスでの世界大会時に経験した強烈な反日感情、その背景にある戦争の傷跡……。

紙面のほとんどを「ピンポン外交」に費やしてしまったが、この本の「主役」はもう 1 人いる。「貧しいやせっぽちの高校生」だったときから荻村が通い続け、その活躍を陰で支え続けた、町の小さな卓球場を経営する「おばさん」上原久枝だ。卓球場の 40 年誌『地球の中の別世界』に荻村が寄せた詩は次の言葉で始まる。「天界からこの蒼い惑星の／いちばんあたたかく緑なる点を探すと／武蔵野卓球場が見つかるかもしれない」。本書は荻村と「おばさん」、2 人の物語でもある。

本書は、のりこえねっと TV「のりこえ部活動 第 1 回 卓球部」※で知った。合わせて観ていただければ、「人間・荻村伊智朗」と彼が実現しようとしたことがより理解できるのではと思う。(H)

※https://www.youtube.com/watch?v=DbSOYWXgq_k



人権啓発研究第42回兵庫県集会

日時：2021年11月20日(土) 13:00～16:30

参加方法：(1) 神戸市勤労会館【大ホール】※定員 250 人

参加費：3,000 円（討議資料・報告書含む）

(2) オンライン配信

参加費：3,000 円（討議資料・報告書含む）

(3) サテライト会場（県内隣保館等）

※定員は各館によって異なります。

当日資料代：500 円（報告書は含みません）



雨宮処凛さん

参加申込締切：2021年11月12日(金)

参加申込方法：参加方法によって異なります。詳細は8月下旬頃、開催要項、HPでお知らせします。

13:00 開会行事

13:20 記念講演「コロナ禍の貧困の現場から見えてきたもの」(70分)

講師：雨宮処凛さん（作家・活動家）

14:40 シンポジウム「格差社会を考える」(110分)

パネリスト：髙本郁さん（神戸の冬を支える会理事・NGO 神戸外国人救援ネット）

青山薫さん（神戸大学大学院国際文化科学研究科教授）

コーディネーター：宮前千雅子さん（関西大学・神戸市外国語大学他非常勤講師）

お問合せ：人権啓発研究第42回兵庫県集会事務局（ひょうご部落解放・人権研究所）

〒650-0022 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階

TEL：078-252-8280 FAX：078-252-8281 mail：kenkenhyogo@gmail.com

《ひょうご部落解放・人権研究所第3回人権セミナー》

「同和対策事業から平等を考える」

講師：柴原浩嗣さん（一般財団法人 大阪府人権協会事務局長）

日時：2021年9月18日(土) 14:00～16:00

参加方法：①会場参加【兵庫県立のじぎく会館201号室】（定員50人）②Zoom配信（定員90人）

参加申込：メールやお電話の他、HPからもお申し込みいただけます。

<http://blrhyg.org/seminar/seminar.html>

事務局から

- 先日、モデルナのワクチンを接種したところ（1回目）、微熱、ひどい倦怠感、痛みがひどく腕が上がらない等の副反応があり、仕事を休みました。2回目が思いやられます。（ka）
- 韓国政府の外郭団体が、韓流ドラマと漫画の翻訳コンテストを行った。韓ドラファンとしては憧れの字幕翻訳。いざやってみると、なんと難しい。見事に予選落ちしました。（K）
- 7月18日の兵庫県知事選挙。前副知事の金澤和夫さんが維新・自民推薦候補に負けた。実績、人柄…、知れば知るほど「絶対知事になってほしい」と思える人だっただけに本当に悔しい。大阪のように人権、福祉、医療、住民サービスが削られないようにしなければ（H）
- 2歳になった娘ちゃんはジブリが大好きです。「となりのトトロ」のおばあちゃんになりきって「あんたらにも見えたんけえ」とくり返しています（笑）（ひ）